

岡田強とロールシャッハ法

佐渡 忠洋

心身マネジメント学科

Kyoh Okada and the Rorschach's Inkblot Method

Tadahiro SADO

要旨

本研究では、1930年代前半にロールシャッハ法（RIM）に取り組んだ精神医学者・岡田強の業績が検討された。岡田の略歴、RIM以外の研究、そして人柄を紹介した後、彼のRIM業績を5つに分けてそれぞれ概観した。研究Aは標準を理解するもの、研究Bは施行手続きを改善するもの、研究Cは評価基準を明確にするもの、研究Dは統合失調症者に接近するもの、研究Eは博士論文である。岡田のRIM業績は、1931年までの国内外のほぼすべての研究と同じように萌芽的であったため、今日から見ると歴史的事実としての意味しか持たない。しかし、インクプロットにおいて部分反応が出現する頻度を明らかにした「図形形成可能度」と呼ばれた着想は、現代RIMシステムの一部を先取りした知見であった。

キーワード：岡田強、ロールシャッハ法、図形形成可能度

Abstract

This paper examined the work of psychiatrist Kyoh Okada who studied the Rorschach's Inkblot Method (RIM) in the early 1930s. After briefly introducing Okada's history, his research except for his work with the RIM, and his personality, I divided his RIM research into five areas and outlined each: A) understanding the norms; B) improving the test procedures; C) clarifying the rating criteria; D) approaching the individuals with schizophrenia; and E) his doctoral dissertation. Today Okada's RIM work only has meaning from a historical perspective since the research were exploratory like the majority of studies in Japan and abroad until 1931. However, his idea, the figure-forming-possibilities, clarified the frequencies with which the detail responses appear in the inkblot, and was a finding that contributed in a small part to the modern RIM systems.

Keywords : Kyoh Okada, Rorschach's Inkblot Method, figure-forming-possibilities

1. はじめに

1930年頃、わが国におけるロールシャッハ法 (Rorschach's Inkblot Method: RIM) 研究の始まりには2人の先達がいた (秋谷, 1998)。関東で活動した内田勇三郎と、関西で活動した岡田強である。内田については、これまで同じ心理学者たちが何度か取り上げ、報告してきた (Sorai & Ohnuki, 2008; 安齋, 2007 など)。有名な作業検査「内田クレペリン検査」の紹介部分で、創案者・内田は最初の RIM 研究者であるとも明記される。一方、精神医学者である岡田は、あの時代において先進的な仕事を行っていたにも関わらず、十分論じられてこなかった。

そこで筆者は、日本の RIM 史の最初期に活躍した岡田強 (Kyoh Okada^{註1}: 1895-1974) に光を当てたいと思う。したがって本稿が目指すのは、RIM の心理学史探求として、岡田の研究の特徴を描出し、彼の仕事の位置づけを行うことである。

2. 岡田強という人

まず岡田について粗描する。

最初に略歴である (岐阜県立医科大学, 1951; 岐阜大学医学部三十年史・附属病院百年史編集委員会, 1977; 難波, 1977; 浦島, 1994; 泉, 2012; 杉本, 2014)。1895年6月16日、福岡生まれ (久留米藩士で尊王攘夷派の真木和泉守の子孫だと聞いた者もいる)。1923年九州帝国大学医学部卒業後、京都帝国大学精神医学教室入局 (今村新吉門下)。1927年同講師、1931年京都脳病院長、1932年医学博士 (京都帝国大学)、1947年兵庫県立甲風寮副院長を経て、1952年岐阜県立大学教授。大学改称により1954年岐阜県立医科大学教授、1958~60年同大学附属病院院長、1960年から学長。学長時に岐阜大学医学部への移管を行い、1964年から医学部長兼任、同年教授職は勇退。1966年の大学退職後、羽島市国民健康保険羽島病院院長を2年余務めて精神科を開設。1966年には勲二等瑞宝章を受章。晩年は京都の嵯峨で隠居し、1974年鬼籍に入った。

岡田の研究は、RIM を除くと次のように要約できる。京都時代には精神病理学研究を数編と著書2冊を残した。文芸・文化への関心が表れた精神病症候論『文明と狂想』(1936) は風刺をきかした社会論、森田正馬の影響が顕著な神経症論『神経と生活』(1942) は情感溢れる日本人論でもある。後の岐阜時代は、哲学 (特に独仏語圏の存在論) の影響が前景化した難解な論考を著した。大学の最終講義 (1964) には L. Binswanger を選んだが、それは当時の流行にのったためではない。全業績を読むと、岡田の志向は人間学と理解できる。自らの精神医学の方向性の宣言とも解せる最初の論文 (1926) から、既に Binswanger (1923b) の影響が色濃く見えるからで

ある。したがって岡田の足跡とは、日本における人間学的精神医学の初期の実践・攻究といえ、この系譜としては、たとえば荻野恒一らの先駆と位置づけられうる。

最後に、人柄を伝える話をまとめる。潔癖の傾向があった (岡田, 1942; 杉本, 2014)。医局宴会だけでなく学会にも参加することはなく、周囲に自分の業績や経歴をほとんど語らなかつた (難波, 1977; 杉本, 2014)。時に含蓄ある示唆を言葉少なめに口にしたが、周囲からは世間離れした人と見なされていた (杉本, 2014)。京都大学の自由な学風を岐阜に持ち込み、医局員への指示や研究指導はなく、しかし K. Jaspers は熟読するよう推奨していた (杉本, 2014)。医局でカナリヤや犬を飼う時期があり (浦島, 1977, 1994)、これは H. Rorschach のサルを想起させるエピソードである。抗精神病薬の処方には疎かった (杉本, 2014)。言葉の使用には極めて厳密で、たとえば患者を病者と呼ぶことを嫌い、医局員が口にした時には珍しく注意した (杉本, 2003)。診断は感得 (Kennerschaft) の問題で直観が重要という考えを持ち、ジッと患者を見つめただけで診断を下す時があった——そのため Schreiber は記録に頭を抱え、誤診も時にあった (杉本, 2003, 2014)。勲章を受章した時は、それを医局に披露しに来たという (杉本, 2014)。これらから、岡田は内向的な人だったと想像できる。

以上の3点は、主に岐阜時代の資料に依拠している。不十分な部分もあろうが、病跡学的検討が本研究の目的ではないため、RIM 業績の理解へと進む。なお、岡田の業績一覧は佐渡ら (2019) で列挙してある。

3. 岡田の RIM 研究

岡田がいつ・どのようにして RIM と出会い、着手に至ったのかは明らかではない (佐渡ら, 2019)。京大精神医学教室が購読する海外雑誌から RIM を知り、博士論文のために着目したとも、Binswanger (1923a) の論文から RIM に入ったとも想像できる。そして、彼が『精神診断学』を手にして実施を始めた時期も分かってはいない。欧州で追試が発表され始めた1925年あたりと考えるのが妥当なところであろうか (Pfister, 1925; Enke, 1927 など)。

さて、RIM 研究を岡田がまとめたのは、京都時代、1930~32年のわずか3年間 (35~37歳になる年) である。確認できた8つの文献は、研究 A (1930a&b)、B (1930c)、C (1932a&b)、D (1931, 1932c)、そして E (1932d) の5つに分けることができる。以下、順にこれらを概観する。

3.1 研究 A——ノルム構築

本研究では、15~50歳の非臨床群100名の RIM 全反応を精査し、それぞれの図版 (岡田は図版を「テキスト」という) において反応数がどのように変わり、どういった反応内容が多いかを、出現頻度を使って明らかにした。

これはいわば標準をおさえる試みといえ、これを本邦で改めて行うことは、RIM 研究着手に不可欠な作業であったらうし、同時に RIM 実施の錬磨にもなったことだろう。

さらに、各図版で反応が生じやすい領域を特定し、これを図形形成可能度と名付けた (図 1)。これに関しては、次節で再び取り上げる。

3.2 研究 B—施行法の改善

岡田は、H. Rorschach の原法には実施上の問題と反応分類上の問題があると看する。そして本研究では前者、施行の問題の明確化とその乗り越えが試みられた。研究 A および若干の臨床事例への実施経験に基づき、図版は手を伸ばして持つ、図版回転を許可する教示を加える、1つの図版は最短 10 分程度とする、その時間の反応拒否に対しては対象者を鼓舞して反応を得る、対象者の質問には暗示的にならない程度に応える、などとした。

これは原法の施行手続きを若干改善させた論考である。今となれば目新しくはないが、この部分の説明は『精神診断学』でも曖昧なため、岡田にとって詳細な施行手順

に疑問を持つこと、その解消を模索することは不可避であったらう。

3.3 研究 C—評価法の改善

次は、研究 B で指摘した、反応の評価の問題を扱ったものである。岡田は反応領域、決定因、形態水準、そして反応内容などについて、それぞれ Rorschach の考えを整理し、不明瞭な点を指摘し、自らの実施経験も踏まえて、実際の評価作業に使用する基準を記述した。たとえば、第Ⅲ図版の両側の黒色部分で「人」と反応された時、それを全体反応とする理由 (Rorschach, 1954 [1921], S.37) を詳述するなどである。最も特徴的なのは、今日では極めて有意義な視点とされる平凡反応ではなく、独創反応 (岡田は「新規反応」と訳す) の整理に多くのエネルギーを費やしている点である。これは Rorschach 自身が平凡反応より独創反応に多く言及したため、形態水準の基準修正のためかもしれない。岡田は抽出した計 1,435 個の独創反応を、28 頁という紙幅を使って論文内でリストにしている。

さらに、各スコアの計算法を考察し、Rorschach が用

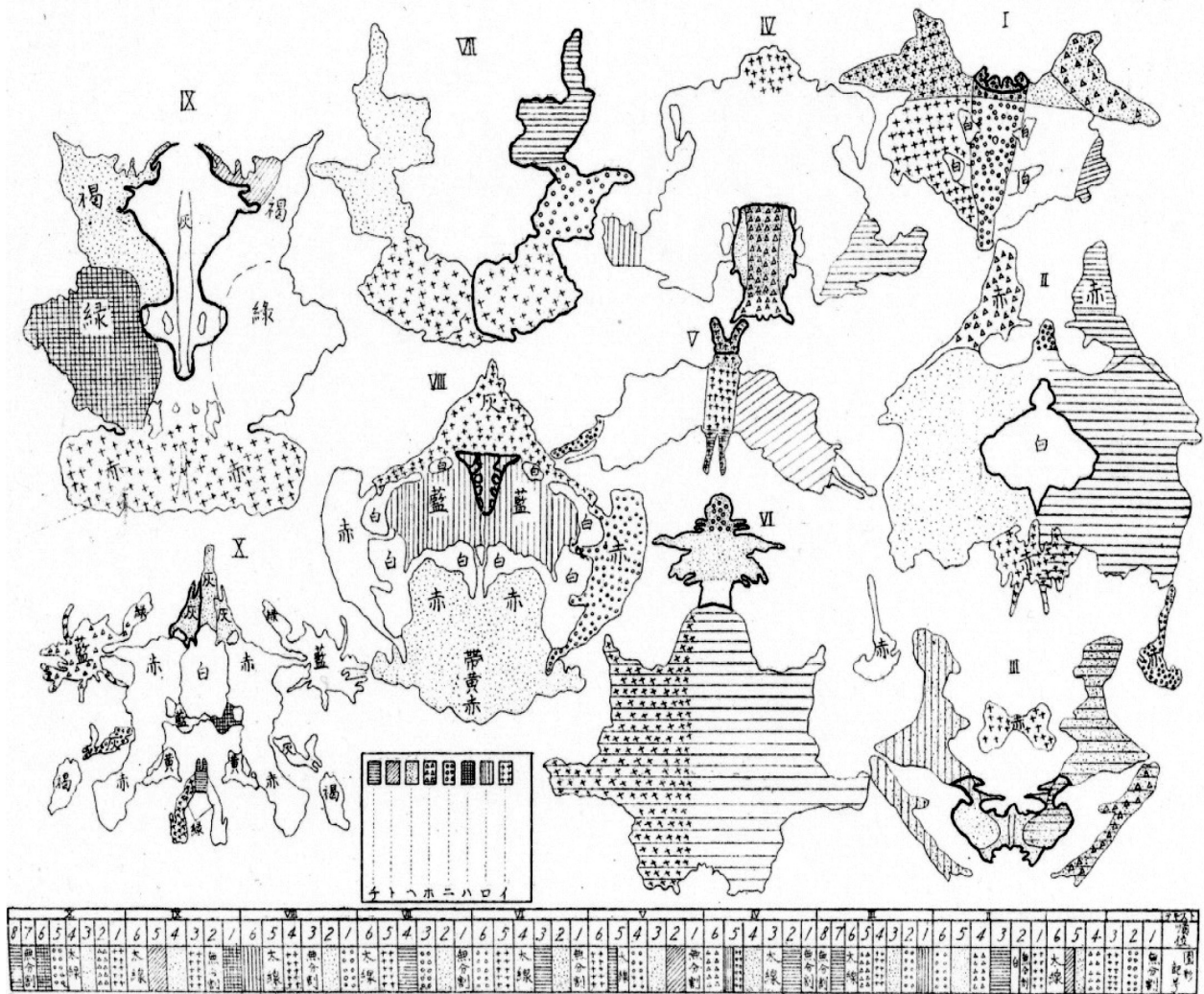


図 1 図形形成可能度 (岡田, 1930b より)

いた連合と知覚と感覚などの概念を整理した後、各スコア、体験型、そして把握様式について解釈仮説を略述している。ここで注目すべきは、Rorschach の精神分析的な考えに「単調」と異見している部分である。著書 2 冊からもうかがい知れることだが、岡田は精神分析学に批判的な立場だったようだ。

3.4 研究 D——統合失調症へ

これまでの研究で、岡田は研究遂行の基盤を定めることに成功したとする。そして行ったのが、この実験精神病理学研究である。

18～61 歳の統合失調症患者（師の今村に倣い、岡田は「精神分裂症」の訳を使用する）21 名に対して供述試験と RIM が実施された。この供述試験とは、ある絵（実物不明）を見せて「これは何をしているところですか」と説明を求める検査で^{註2}、岡田は非臨床群への実施から「母親が子どもを心配している」を普通反応と定めた（12 名中 11 名がこのように集約できる回答をしたため）。そして、統合失調症患者の供述試験で普通反応が出た 10 名を供述に異常なし、出なかった 11 名を異常ありとし、供述異常の有無で RIM 結果を比較したのが彼の方法論である。結果では、全対象者の供述試験と RIM の結果を提示している。

そして岡田は、供述異常を示した統合失調症患者の RIM 特徴をこうまとめている。良形態反応が少なく、不良形態の独創反応が多く、外拡型の者が多い。ただし、この結果の解釈は一切論じられない。最後に彼は研究 A～D の総括として、本稿でおおむね紹介してきた内容を箇条書きで著し、稿を終えている。

3.5 研究 E——博士論文

研究 C と D の合本論文（計 308 頁）によって、1932 年、岡田には医学博士が授与された。これが日本で最初の RIM 博士論文である。

3.6 小 括

以上が岡田の研究の骨子である。京大精神医学教室は、わが国最初の RIM 研究者として岡田の名を記す（笠原、2003 など）。しかし筆者が確認した限りでは、岡田自身は博士論文以降、RIM 研究を一切行わず、自らの業績はおろか技法にすら触れることはなかった。彼が RIM を離れた理由は不明である。学位取得後にその研究を離れる者は多いが、岡田もその一人かもしれない。

さて、岡田の研究は基礎に隔たっていると、精神病理学者として真骨頂となりえたはずの研究 D は十分な考察を欠いており、知見は統合失調症の精神病理を探求する上でも、統合失調症の識別する上でも不十分である、と感じる者もいよう。今日からすれば、それは当然の物足りなさで、技法の発展がすすみ、詳細な知見が積み重ねられている今、岡田のこの知見がわれわれの臨床と研

究に直接資する点は、ほばないと言える。ただし、彼から約 90 年後に舗装された道を歩むわれわれが、彼の仕事を批評することは容易である。RIM に質疑応答階さえない時代に、被験者体験もできず独力で、『精神診断学』原著と若干の追試のみを手掛かりに取り組んだ岡田の研究とはこのようなものであったと、そのまま受け入れることがフェアであろう。

4. 岡田の位置づけ

岡田の仕事が当時の RIM 界にどのように位置づけられるのかを検討する。この考察は、日本の RIM 史の始まりを一層鮮明にすると考えるためである。

4.1 内田との比較

まず、国内での位置づけである。

内田の RIM 研究（内田・松井・本田ほか、1930a&b）とは、E. Kretschmer の体格的類型論と RIM 結果との関連を検討したもので、ほば Munz (1924) の追試である。この研究では、RIM は調査に使用された数種類の検査の一つでしかなく、しかも RIM の結果と解釈はほとんど記されていない。したがって、岡田と内田の研究を比較すると、まずは岡田の方が丁寧な仕事であったと理解できる。また、解釈仮説でも岡田の方が深みのある論となっている。

このことから、日本の RIM 史の始まりには、少なくとも岡田と内田の名が等しく挙げられるべきであろう。^{註3}

4.2 世界の研究の中で

次に、世界での位置づけである。ここでは技法研究（研究 B&C）と統合失調症研究（研究 D）の 2 点を論じる。筆者が収集できた最初期（1921～31 年）の RIM 論文 27 編を検討した（引用は言及した場合のみ行う）。

当時、技法の洗練だけに取り組んだ論文はないが、施行と分類についてはどの研究者も困難さを感じたようで、いくつかの論文内で頻りに検討されている。たとえば、施行に関しては Löpfe (1925) が実験結果からも検証を行い、分類に関しては Pfister (1925) や Enke (1927)、Veit (1927)、Bleuler (1929) など多くの者が整理を試みている。しかし、これらの研究のいずれもが十分な成果を挙げてはいないため、岡田の技法研究においても斬新さが見えないのは当然かもしれない。技法の飛躍はその後の、いわば第二世代の台頭による。つまり、Rorschach の原法が抱える諸問題の克服はもちろん、一定以上の水準で打ち立てられた独創的・体系的な RIM 手引書の刊行を待たねばならないのである。たとえば、まず英語圏で Beck (1937) や Klopfer & Kelley (1942) を、次いで独語圏で Bohm (1951)、仏語圏で Loosli-Usteri (1958)、日本においては戸川・本明 (1950) や片口 (1956) などである。

統合失調症研究は、Banziger (1927) と Boss (1931) がそれぞれ 1 事例を検討しているのみである。したがって、統合失調症者特有の RIM 反応については、あるいは RIM 反応を通じた統合失調症世界の探究については、Rorschach が『精神診断学』で記載した以上の知見を最初期には誰も得ておらず、岡田の研究のみが踏み込みの浅い取り組みだったとは言い難い。

上の概観により、最初期では、岡田の仕事だけではなく、世界のあらゆる RIM 研究が萌芽的な状態であったといえる。

4.3 図形形成可能性

ところが、研究 A における図形形成可能性という知見には先見性があった。岡田のように、部分反応の領域を反応出現頻度から明確化する研究は、最初期の海外にはまったくない。Rorschach (1954 [1921], S.38-39) は部分反応について、たとえばこう言っている。

D〔部分反応〕は、空間内の図像配置のために最も目に入ってくる部分である。D は統計的手法で定めることは、良形態〔の基準〕と同じく可能だが、不要である。健常な 50 名の一般人に実験を行えば、こうした標準的な部分というものの大半を識別するからである。

創案者のこの考えが、部分反応の領域の識別化という取り組みを遅らせていたと思われる。

今日の多くの RIM システムで D1 や d3 といった領域の枠組みがある。付された数値の小ささが反応頻度の高さを示すものは、後に海外においては Beck 法や Hertz 法や包括システム、日本においては片口法や阪大法や日本女子大法、そして Beck に倣う名大法である。したがって、図形形成可能性はこの点に関する世界で最初の仕事と位置づけられる。精神病理学者である岡田の RIM 研究の中で最も先進的だった知見とは、基礎研究から得られたものだったのである。

5. おわりに

当時の RIM 事情を踏まえて岡田の業績を検討した。日本の RIM の最大功労者の一人・片口安史は著書の中で、岡田の研究を評価する一文を記している（片口, 1987, p.15）。それは“その当時”としては世界的にも優れている、という意味であろう。したがって、岡田の研究は図形形成可能性という先見性を有していたが、以後の RIM は後進たちによる著しい発展のために、今日からすると研究と臨床に資する点はない、と位置づけられる。それは岡田の業績を熟読すれば明らかなように理論面（実施法や図形形成可能性を含む）では学ぶところは当然あるけれど、今日の RIM の知的体系からすれば、精神病理学的深化に不十分さを感じずにはおれないから

である。しかしながら、岡田はわが国へ RIM を輸入し、最初に綿密な研究を行った医学者であること、当時は世界的にも先進的な研究を行っていたことは確かめられた。

岡田が RIM で活躍した 1930 年代という時代を、今日的な視点や価値観でもって理解することには慎重であらねばならない。時は連続して現在に至るとしても、学問の発展は最初期の学術知見を、否が応でも置き去りにする。そこで本稿では、「当時」と「現在」とを分けて岡田の業績を検討した。時代のこうした差異を理解しなければ、たとえば、古典文学の端々に、21 世紀の枠組みを押し付けるような過ちをおかすことになろう。すなわち、本稿は岡田の業績を「今日からすると研究と臨床に資する点はない」と、最大級の敬意と批判的な目をもって判断したが、それは岡田の業績の価値を貶めるものではない。岡田が論じた知見がそのまま今日でも有用であると判断する姿勢は、筆者には、単なるセンチメンタルな歴史解釈だと思われてならないのである。このことは同時に、今日の RIM 体系が先達の業績に負っているという事実にも、われわれの目をいま一度向けさせてくれるのである。

日本の RIM 史の始まりに、精神医学者・岡田強が存在したことを、筆者は再度強調したい。

註 釈

1. 初期の諸論文では「T. Okada」や「Tutomu Okada」とあるが、本稿では 1964 年の論文の表記に従った。読み（ローマ字表記）が異なる理由は不明。
2. Jaspers (1973, S.138) によると、供述試験とは実験精神病理学の一手法で、「ある絵をよく見てからその絵について自発的な描写をさせる課題で、その描写はさらに細かい点の追求により補足されたり、それに応じて物語が話させたりする」ものである。したがって、ここでは、構造化の程度が高い TAT に似た図版を使い、それに対して平凡反応が出るか否かを確かめた、とイメージすれば十分である。
3. 岡田がほとんど注目されなかった理由に、後進の心理学者たち（つまり RIM ユーザーの大半）が同じ心理学者である内田の方を選択的に取り上げたこと、岡田が弟子を育てなかったこと、そして彼が内向的な人格であったこと、を筆者は考えている。しかし、これ以上本稿では踏み込まない。

謝 辞

杉本直人先生はインタビューに協力してくださり、その内容の公表も許諾してくださった。伊藤宗親先生は本研究へ貴重な示唆をくださった。日本精神神経学会の機関誌編集委員会からは『神経学雑誌』から図の転写を許可いただいた。記して感謝申し上げる。

文 献

- 秋谷たつ子「機関誌の発刊に寄せて」『ロールシャッハ法研究』1巻, 1-2頁, 1998年.
- 安齋順子「ロールシャッハ・テストと内田勇三郎」『心理学史・心理学論』9号, 55-58頁, 2007年.
- Bänziger, H., Die Frage der Schizophrenie bei einem Mitglied der Sekte Anton Unternährers. *Zeitschrift für die gesamte Neurologie und Psychiatrie*, 110, 627-694. 1927.
- Beck, S. J., *Introduction to the Rorschach Method: A Manual of Personality Study*. New York: The American Orthopsychiatric Association. 1937.
- Binswanger, L., Bemerkungen zu Hermann Rorschachs "Psychodiagnostik". *Internationale Zeitschrift für Psychoanalyse*, 9, 512-523. 1923a.
- Binswanger, L., Über Phänomenologie. *Zeitschrift für die gesamte Neurologie und Psychiatrie*, 82(1), 10-45. 1923b.
- Bleuler, M., Der Rorschachsche Formdeutversuch bei Geschwistern. *Zeitschrift für die gesamte Neurologie und Psychiatrie*, 118, 366-398. 1929.
- Bohm, E., *Lehrbuch der Rorschach-Psychodiagnostik: Für Psychologen, Ärzte und Pädagogen*. Bern: Hans Huber. 1951.
- Boss, M., Psychologisch - charakterologische Untersuchungen bei antisozialen Psychopathen mit Hilfe des Rorschachschen Formdeutversuches. *Zeitschrift für die gesamte Neurologie und Psychiatrie*, 133, 544-575. 1931.
- Enke, W., Die Konstitutionstypen im Rorschachschen Experiment. *Zeitschrift für die gesamte Neurologie und Psychiatrie*, 108, 645-674. 1927.
- 岐阜大学医学部三十年史・附属病院百年史編纂委員会編『岐阜大学医学部三十年史・附属病院百年史』岐阜大学医学部・附属病院, 64-245頁, 1997年.
- 岐阜県立医科大学「教育研究業績目録(第一輯)」『岐阜県立医科大学』117-118頁, 1951年.
- 泉孝英『日本近現代医学人名事典』医学書院, 132頁, 2012年.
- Jaspers, K., *Allgemein Psychopathologie, 9. Aufl.* Berlin, Heidelberg: Springer. 1973.
- 笠原嘉「精神病理学」京都大学医学部精神医学教室編『精神医学京都学派の100年』ナカニシヤ出版, 10-15頁, 2003年.
- 片口安史『心理診断法——ロールシャッハ・テスト』牧書店, 1956年.
- 片口安史『改訂 新・心理診断法——ロールシャッハ・テスト』金子書店, 1987年.
- Klopfer, B. & Kelly, D. M., *The Rorschach Technique: A Manual for a Projective Method of Personality Diagnosis*. New York: World Book. 1942.
- Löpfe, A., Über Rorschach'sche Formdeutversuche mit 10-13jährigen Knaben. Dissertation, Universität Zürich. 1925.
- Loosli-Usteri, M., *Manuel pratique du Test de Rorschach*. Paris: Hermann. 1958.
- Munz E., Die Reaktion des Pyknikers im Rorschachschen psychodiagnostischen Versuch. *Zeitschrift für die gesamte Neurologie und Psychiatrie*, 91, 26-92. 1924.
- 難波益之「神経精神医学講座・神経科精神科」岐阜大学医学部三十年史・附属病院百年史編纂委員会編『岐阜大学医学部三十年史・附属病院百年史』岐阜大学医学部・附属病院, 364-379頁, 1977年.
- 岡田強「精神症候の見方に就て」『生理学研究』3巻11号, 707-714頁, 1926年.
- 岡田強「ロールシャッハ氏精神診断學用「テキスト」ノ含ム形態竝ビニ意味ノ研究」『神經學雜誌』31巻8号, 652頁, 1930a年.
- 岡田強「ロールシャッハ氏ノ所謂「神神診断學」ノ實驗的考察(第一回報告)——ロールシャッハ氏精神診断學用「テキスト」ニ於ケル形態竝ビニ意味ノ研究」『神經學雜誌』32巻5号, 43-55頁, 1930b年.
- 岡田強「ロールシャッハ氏ノ所謂「神神診断學」ノ實驗的考察(第二回報告)——ロールシャッハ氏「精神診断學」ノ施行方法ニ對スル實驗的研究」『神經學雜誌』32巻6号, 41-49頁, 1930c年.
- 岡田強「精神病者殊ニ精神分離症患者ニ於ケル供述異常ノロ氏神神診斷學的分析」『神經學雜誌』33巻3号, 176-177頁, 1931年.
- 岡田強「ロールシャッハ氏ノ精神診断學ニ於ケル反應ノ質的分類竝ニ本法ニヨル供述異常ノ分析(上)」『神經學雜誌』35巻2号, 39-82頁, 1932a年.
- 岡田強「ロールシャッハ氏ノ精神診断學ニ於ケル反應ノ質的分類竝ニ本法ニヨル供述異常ノ分析(中)」『神經學雜誌』35巻3号, 59-75頁, 1932b年.
- 岡田強「ロールシャッハ氏ノ精神診断學ニ於ケル反應ノ質的分類竝ニ本法ニヨル供述異常ノ分析(下)」『神經學雜誌』35巻4号, 70-91頁, 1932c年.
- 岡田強「ロールシャッハ氏「精神診断學」ニ於ケル反應ノ質的分類竝ニ本法ニヨル供述異常ノ分析」京都帝国大学博士論文, 1932d年.
- 岡田強『文明と狂想』人文書院, 1936年.
- 岡田強『神経と生活——神経質の病療誌より』青山出版社, 1942年.
- 岡田強「L. Binswangerの精神病学」『岐阜醫科大學紀要』12巻4号, 320-324頁, 1964年.
- Pfister, O., Ergebnisse des Rorschachschen Versuches bei Oligophrenen. *Allgemeine Zeitschrift für Psy-*

- chiarie und psychisch-gerichtliche Medizin*, 82, 198-223. 1925.
- Rorschach, H., *Psychodiagnostik: Methodik und Ergebnisse eines wahrnehmungsdiagnostischen Experiment [Deutenslassen von Zufallsformel]*. 7. Aufl. Bern, Stuttgart, Wien: Hans Huber. 1954 [1921].
- 佐渡忠洋・古谷学・堀田亮「日本のロールシャッハ法の輸入過程」『常葉大学健康プロデュース学部雑誌』13巻1号, 145-154頁. 2019年.
- Sorai, K. & Ohnuki, K., The Development of the Rorschach in Japan. *Rorschachiana*, 29, 38-63. 2008.
- 杉本直人「岐阜でのこと」京都大学医学部精神医学教室編『精神医学京都学派の100年』ナカニシヤ出版, 66頁. 2003年.
- 杉本直人「Personal communication」於 医療法人杏野会各務原病院. 2014年2月14日.
- 戸川行男・本明寛『臨床的精神診断法手引——早稻田大学改訂 ロールシャッハ検査』金子書房. 1950年.
- 内田勇三郎・松井三雄・本田實昌ほか「素質の實驗類型心理學的研究（一）」『教育心理研究』5巻, 323-345頁. 1930a年.
- 内田勇三郎・松井三雄・本田實昌ほか「素質の實驗類型心理學的研究（二）」『教育心理研究』5巻, 385-417頁. 1930b年.
- 浦島誠司「回顧録」岐阜大学医学部三十年史・附属病院百年史編纂委員会編『岐阜大学医学部三十年史・附属病院百年史』岐阜大学医学部・附属病院, 597-601頁. 1977年.
- 浦島誠司「神経精神医学講座——昭和19年～昭和41年」岐阜大学医学部創立50周年・同附属病院創立120周年記念事業実行委員会記念誌部会編『岐阜大学医学部50年史・附属病院120年史』岐阜大学医学部・附属病院, 184-185頁. 1994年.
- Veit, H., Der Parkinsonismus nach Encephalitis epidemica im Rorschachschen Formdeuteversuch. *Zeitschrift für die gesamte Neurologie und Psychiatrie*, 110, 301-324. 1927.